

《第40号》「きたなきもの」

足立則夫(ナメコロジー研究会主宰 日本経済新聞社特別編集委員)

「いみじうきたなきもの なめくぢ」。平安時代、清少納言が『枕草紙』にそう書いていた。考えてみると私たちは、見るに汚くて、気味の悪い、この小動物を古来、忌み嫌い、ずっと遠ざけて来たようだ。

ところが、13年前、新聞のコラムで取り上げて以来、書齋で飼育したり、友人や知人から目撃情報を寄せてもらったりしているうちに気がついた。ナメクジが実に示唆に富んだ動物であることに、である。

江戸時代、芭蕉の弟子、内藤丈草は武士というサラリーマン人生が嫌になり、突如、出家する。その際の心境を漢詩に書いた。

多年負屋一蝸牛 化做蛞蝓得自由(後略)(長い間、カタツムリの殻のような屋根を背負ってきた。殻を捨てナメクジになったら心が自由になった)。

ナメクジが最初の殻を脱ぎ、カタツムリから独立したのは2億年ほど前と、私は踏んでいる。薄い皮膜で覆われた虚弱な体を守ったり、飾ったりする殻をぬいだ理由は謎に包まれている。それを自由の象徴として捉える俳人もいたのである。

ある女子大で非常勤講師をしている。梅雨時の授業で必ず「ナメクジ」を取り上げる。ナメクジとともにラップ、定規、意図を持参し、学生に歩くスピードを測らせる。分速〇〇センチという結果が出たところで、1人ひとりに尋ねる。「なぜ、地球上でナメクジは生き残ったのか？」

正解は分からない。答えは何でもOKだけれど、歩くスピードが遅い→食べる量が少なくて済む→エネルギー節約型のライフスタイルによって生き延びられた、と答えてくれると、授業はまとめやすくなる。

この小動物だけで90分の授業が成り立つのだから、ありがたい。「きたなきものナメクジ」は示唆に富んだ教材である。

以上